受付番号	

留学・研究計画書

氏　名　　中松　万由美	留学機関名　王立プノンペン芸術大学
留学先国名　　カンボジア王国	留学期間　西暦　2009 年 4 月 ～ 2011 年 3 月

研究テーマ

カンボジア、バイヨン寺院の建造過程と建造年代について
～出土遺構の痕跡と出土遺物の分析から～

研究テーマの説明　　（テーマの学術的・社会的意義についても記載してください）

本研究は、カンボジアが最大の版図を誇ったジャヴァルマン7世王の都城アンコール・トムの中心に位置するバイヨン寺院に焦点をあて、その建造過程と建造年代について検証することを目的としている。

バイヨン寺院は、12 世紀の後半、ジャヤヴァルマン7世王（1181～1220AD）により建立が開始され、その後4代にわたる王位継承のうちに複数回の増改築や宗教的改変が加えられたと推測されている。しかし、その実情は過去約1世紀にわたる調査・研究を経た今も、その見解が二転三転しながら明確な答えが得られていない。申請者は、この問題を解決するために、現在、日本国政府アンコール遺跡救済チームによる「アンコール・トム、バイヨン寺院の保存」プロジェクトに参加しており、建築史学及び、考古学の双方からバイヨン寺院の発掘調査に携わっている。

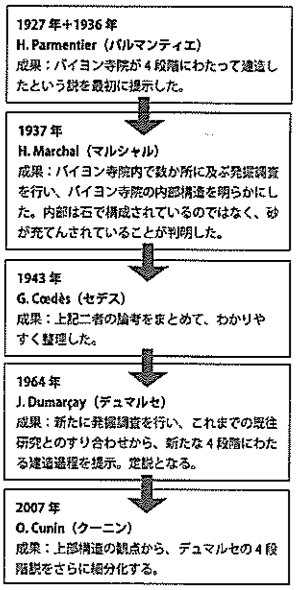

図 1:バイヨン寺院の建造過程研究のフローチャート

【学術的な意義】　バイヨン寺院に関しては、1900 年代初頭から建造過程に関する研究が提唱されてきた（図 1）。以上をまとめると、建造過程は以下の 4 つの段階に大別でき、これら一連の増改築の各段階は、建設工事の完成をみることなく次々と新たな計画段階へと移行していることが指摘されてきた。

第1期：十字形を呈する中央の最上基壇および回廊の造営と、基壇上の中央塔およびその周囲の塔の建設。

第2期：十字形の四隅へ新たに回廊を付加することにより、全体平面の矩形に変更して内回廊を建立。

第3期：内回廊よりひとまわり大きく巡らされる外回廊の建設。内回廊と外回廊を繋ぐ 16 棟の祠堂の建設。その後ただちにこれらの祠堂が撤去される。南経蔵および北経蔵の建設。

第4期：ラテライトによる最外周壁の建設。

デュマルセまでの一連の解釈に加えられた、クーニンによる上部構造における増改築の様相に関する指摘は、その緻密さを高く評価しなければならない。しかし下部構造に関しては、デュマルセは複合的な伽藍内にみられる代表的な遺構のみを取り上げ、簡略に記述をすすめ、解釈が困難である個所に関してはこれに拘泥せず、全建造過程を明瞭に述べることを優先しているため、基壇及び基礎構造を含む寺院全体の大局的な建造過程には未だに幾つかの問題点を孕んでいる。これを解決することが本研究の目的である。

【社会的な意義】そこで申請者は、これまでの既往の発掘調査のデータと、申請者自身が参加した新たな発掘調査のデータを統合し、寺院伽藍全体の建造過程の把握と建造年代について解明することを目的としている。一つの寺院建造のプロセスと、寺院の形態が変遷していく年代を追跡した研究は、例が少なく、バイヨン寺院を指標として、同じくジャヤヴァルマン7世が建立したとされる他の寺院の建造過程や建造年代に関しても興味深い影響を与える可能性がある。

書式６

助成番号	08－009

成 果 報 告 書

記入日　　2011年4月25日

氏　名　　中松　万由美	留学先国名 カンボジア王国	所属機関 王立プノンペン芸術大学 日本国政府アンコール遺跡救済チーム
研究テーマ：カンボジア、バイヨン寺院の建造過程と建造年代について ～出土行こうと出土遺物の分析から～		
留学期間　：　2009年　4月　～　2011年　3月		

1.　留学全般についての感想

2009年4月から開始した留学生活は、最初の3か月をシェムリアップで、その後の半年間を首都プノンペンで、そして帰国までの15カ月間を再びシェムリアップでというように、2度にわたって拠点を変更した。最初の3か月は、日本国政府アンコール遺跡救済チームのシェムリアップ・オフィスに籍を置き、アンコール保存事務所（Angkor Conservation Office）の敷地内にある倉庫に足しげく通った。3か月間にわたって作業を続けてみて、2年間の留学期間のうちに達成する作業としては膨大すぎるため、作戦の立て直しを余儀なくされたこと。共に働くカンボジア人スタッフとの意思疎通を図るにはカンボジア語が必須であり、今後の作業を速やかに遂行するためにも語学の習得が必須であることと、独学では一向に上達しない自分の語学能力にいらだちを覚えたことをきっかけとして、プノンペン大学付属の外国人を対象としたカンボジア語講座に通うために首都プノンペンに引っ越すことに決めた。

プノンペンでは、知人の家にホームステイをさせていただいた。このホームステイによって、それまでのアパートでの一人暮らしでは味わえないカンボジアの家庭生活というものが体験できた。例えば最も嬉しかったのがカンボジア家庭料理を堪能できたこと、カンボジアのお盆、水祭り、結婚式等の行事に家族と共に参加できたことである。そして、留学して4カ月目から通い始めた語学学校においては、目に見える進歩があり非常に充実していた。それまでは文字が読めなかったので、耳を頼りにして言葉を覚えようとしていたが、カンボジア語には日本語にはない発音も多く、正しい発音を発声するのは非常に難しいともいわれている。そこで、語学学校に通いながら、まず文字を覚え、その正しい発音を覚え、単語を覚え、徐々に簡単な文章を読むようにした。さらに個人レッスンとして毎日1時間、カンボジア人の先生に教わりながら、カンボジア語で書かれたカンボジア史やカンボジアの芸術に関する文献を読んだ。同時に、王立プノンペン芸術大学の考古学の授業を聴講しに行ったが、先生が来なくて授業が休講するということも間々あった。全てがカンボジア語の授業は、言葉としては半分以上理解できないことが多かったが、内容はそれまで自分が日本語で勉強してきたカンボジア史、クメール美術、考古学、建築学に関するものであったので、なんとなく理解できた。また、プノンペンでの生活で有意義だったのは、同じく松下国際スカラシップの援助を受けて留学している上村未来さんをはじめとした同年代の留学生に研究分野は違えども出会えたことであった。彼女を含めた留学生メンバー数人たちと話し

合い、在プノンペン院生勉強会を立ち上げ、月に一度のペースで週末に集まり、カンボジア関連文献の翻訳や研究成果の発表を設けることができたのも非常に幸運であったと思う。

半年経って、辞書があればなんとか自分で文章を翻訳できるという自身がついてきたころ、指導教官である中川武教授から、私が研究対象とするバイヨン寺院で新たな発掘調査を行うため、それに参加しないかというお誘いをうけ、2009 年 12 月にシェムリアップに再び戻ることとなった。これまでの 9 か月間は、カンボジアで研究を行うための準備期間であり、ここからの 15 カ月間が本格的に自分の研究を行う時間だということを肝に銘じた。

ここから帰国までの研究の経過については次項に記すが、自分の留学生活を全体的に振り返ってみて良かった点は、まずは語学を習得する時間を十分に確保したことが第 1 に挙げられる。これは今後も研究を続けていく上でも最も重要な財産になった。そして、さらに泰大切なのは人脈である。シェムリアップ、そしてプノンペンで出会った在住日本人の方々、語学学校で知り合った先生や友人、プノンペン王立芸大でであったカンボジアの教授や大学生たち、発掘作業を共にしたカンボジアのローカルスタッフや専門家たちとの出会いは私の留学に非常に良い刺激を与えてくれた。ここに記して感謝したい。

2. 調査内容と成果について

2-1. 最初の目的と方法、成果

本留学の目的は、前述のアンコール保存事務所に収蔵されている日本国政府アンコール遺跡救済チームによる過去10年間にわたる考古発掘によって出土した遺物の整理及び分析からアンコール遺跡群に流入している貿易陶磁の様相を把握し、さらには代表的な寺院遺構であるバイヨンの建造過程を考察するというものであった。

写真 1：清掃中の倉庫

写真 2：清掃中の倉庫

前述のとおり 2009 年 4 月 1 日から 6 月末までの 3 か月間はアンコール保存事務所に足繁く通い、遺物が収納してある倉庫の清掃及び保管状況を調査した。1994 年から 2004 年までの 10 年間の調査にて出土した遺物がほぼ未整理のまま倉庫内に納められている現状は留学前から知っていたが、その整理状況がこれほど未完全なものだとは思わず、埃がたまった倉庫の清掃から作業に着手した（写真 1, 2）。

上記の調査の結果、考古遺物は写真のようなプラスチック箱（テン箱）で総計 1910 箱分にものぼることが明らかになった。また、箱の外枠には調査次数、調査地点、調査年月日等を記載したラベルが貼られているものの、中身が必ずしも一致しないことや、ラベルが紛失してしまっていて出土エリアが不明なものも見受けられ、「留学中の 2 年間で到底まとめきれる作業量ではない」ということを 3 か月間の作業を通して痛感した。また、この整理作業を膨大な時間を費やしてやりとげたからといって、その労力に見合う成果が見いだせるのかに関しても疑問をもった。その理由をしては、過去の

調査担当者の手を離れ長年保管されている何万点もの遺物群は時にラベル等も失われており、過去の日誌や資料をもとに膨大な時間をかけて秩序立てて整理したといえども、その資料の出所の正確さには限度があるのではないかという点であった。ここにきて今後の調査研究の方向性を見直さねばならないことを痛感した。限られた留学生活の中で成果を出すにはどうすればよいかを真剣に検討した。

2-2. 新たな調査方法

留学開始直後に直面した問題について指導教授に相談したところ、自分がまったく発掘調査に関わっておらず、未整理であるアンコール保存事務所に収蔵されている遺物の整理をすることも、今後誰かが必ずやらなければならない重要な課題ではあるが、自分が少しでも携わった発掘調査から出土した遺物を整理、分析した上で論文としてまとめたほうがはるかに精度の高い研究ができるのではないかというアドヴァイスをいただいた。そして運よく 2009 年 12 月、日本の指導教員である中川武教授と山本信夫准教授から、来年 1 月からシェムリアップでバイヨン寺院の発掘調査を開始するので参加しないかとお誘いをうけ、調査に参加することに決めた。

この発掘調査はバイヨン寺院の外回廊の南側外郭において、幅 3m、長さ 45m にも及ぶ巨大なトレンチを設定するという大規模なもので、外回廊及びバイヨン寺院がどのような整地・地業のもとに建造を行っているかを確認するための調査であった。また、図 1 のように、上記のロングトレンチの東西に各 1 か所ずつのトレンチを設定し、計 3 か所において発掘調査を行った。

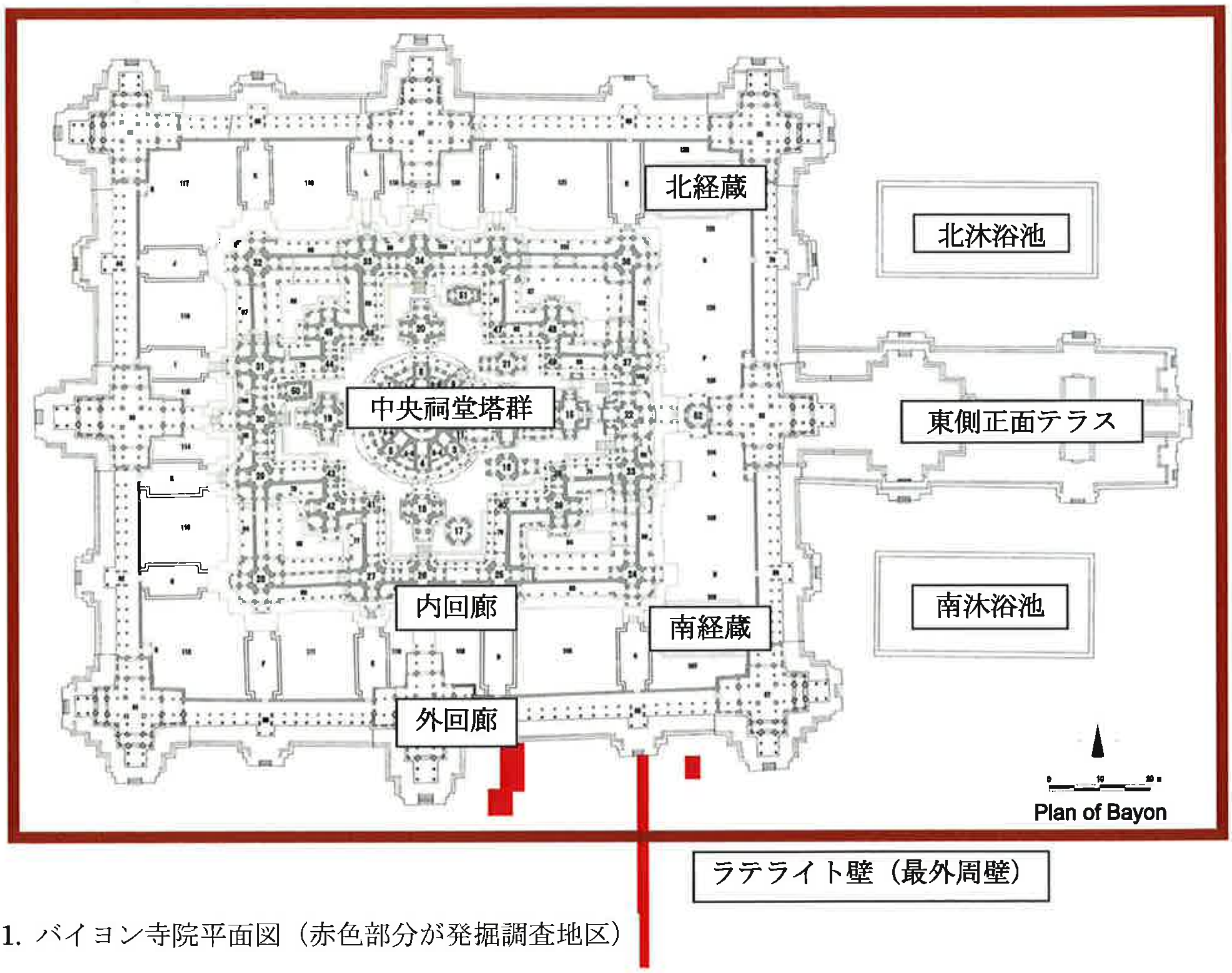

図 1. バイヨン寺院平面図（赤色部分が発掘調査地区）

2-3. 発掘調査から解明されたバイヨン寺院の建造に関する成果（写真 3, 4）

バイヨン寺院の外回廊、南側外郭における発掘調査の成果として、(1) クメール建築に特徴的な外回廊の基礎工事（掘込地業層）が行われていたこと、(2) 外回廊を囲むように配置されるラテライト周壁（現在、高さ 30cm 程の痕跡が残存するバイヨン寺院の最外周壁）と外回廊との空間には石敷きペーブメントの敷設がみられないこと、(3) 反対にラテライト周壁の外側にはラテライト造の敷石の敷設が確認されたこと等が挙げられる。また、(5) ラテライト周壁の外側では、大きく上下に 2 層（2 時期）の整地が確認でき、ラテライト周壁は上層整地上に築かれていることが明らかになった。(6) その上層整地はさらに南外部へと続き、本土層から出土した中国陶磁の年代から推定して、14 世紀前半に行われた厚い砂岩礫層整地と考えられ、従来バイヨン寺院が建設されたとされる 12 世紀後半～13 世紀前半以降にも大規模な土木工事を行っていた可能性が高まった。さらに、(7) ラテライト周壁の外側では、寺院を建てる際に石材加工や金属生産を行うための作業場の存在を確認することができただけでなく、寺院内から寺域外へと水を排水する暗渠施設も検出することができきるなど、バイヨン寺院の建造過程に関する新たな知見を得る事ができた。(8) さらに最下層の地山面では、アンコール・トム南大門とバイヨンを結ぶ南北軸線に沿って 2 本 1 対の細い溝状区画（溝間隔は約 2.5m）が検出された。これはバイヨン外郭壁のすぐ南で東へ屈折しており、バイヨン寺院創建初期の占地や周辺道路関連、あるいはバイヨン寺院より古い時代の区画整理の一部である可能性も指摘できる。今回の発掘調査においては、バイヨン寺院というクメール国家の最重要寺院での調査を通して、クメール文化における建設システム、宗教儀礼、生産と流通、交易システムなどの解明に結びつく痕跡が多く解明されている。これらには当初想定し得なかった課題も含まれており、今後も引き続き注意深く調査していくつもりである。

写真 3：発掘作業風景

写真 4：ロングトレンチ（北側より）

3. おわりに

2 年間にわたる長期的な調査・研究をカンボジアにて実施することが出来たのは、ひとえに貴財団による支援をいただいたおかげです。この留学生活は、私にとって本当に多くの学びをもたらし、かけがえのない友人を与えてくれました。今後はカンボジアでの 2 年間を糧に博士論文執筆にとりかかる所存です。私が初めてカンボジアの遺跡を訪れたのは 2002 年 3 月でした。あれから約 10 年弱という年月の経過は、アンコール遺跡群とその周辺の街並み、自然環境、伝統的な村人の生活にも大きな変化をもたらしています。その大事な過渡期において、2 年間にわたり現地の緩やかでもあり、急速でもある様々な変化を肌で感じられたこの経験は非常に宝物であり、貴財団に貴重な機会をいただけたことへの感謝は筆舌に尽くしがたいものです。長い間ご支援いただき、本当にありがとうございました。